蘭學事始

下

特別
リ5
4747
2

門 り 5
號 1884
冊 2-2

蘭學事始下之巻

此會業怠らすして勤さとりて中次第より同奥の人も相加り寄りつどふ事なりしかは各志す所ありて一様ならす翁ハ一さい彼國解剖の書を得直に実験して東西千古の差ひあるさとを知り明らめ治療の実用ハも立て世の醫家の業ハも發明ある種ハもなくさく一日もとゆく此一部を用立つ様ハなく見度と志を起せし事ハへ他に望む所もなく一日會して解する処ハ其夜翻譯して草稿を立てそれ

大阪府立図書館藏

に付きてハ其譯述の仕ふさを種〻樣〻に考へ直せし事四年の間草稿ハ十一度迄認ふへて板下に渡すやうになり遂に解體新書翻譯の業成就さり抑江戸にて此學を創業して腑分といひ古りし古を新に解體と譯名し且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し我東方闔州自然と通称となるに至れり是れ今時の古と隆盛となるへき最初嚆矢なり今を以て考れハ是迄二百年來彼外科法ハ傳ハりしなれとも直に彼醫書を譯するといふ事ハ絶てなかりしを此時の創業不

可思議にも凡そ醫道の大經大本さる身體内景の書其新譯の起始となりしハ不用意を以て得る所ふして実に天意とやいふへし

一過き去しふさを顧るに未さ新書の卒業に至らさるの前に斯の如く勉勵する古と両三年も過きし漸く其事躰も辨するやうになるふ隨ひ次第に蔵を嗽ふふ如くにして其甘味に喰ひつき去れよて千古の誤も解け其筋さしふに辨へ得し事に至るの楽しく會集の期日ハ前日より夜の明るを待兼る児女子の祭り見よるしの心地せり扨都下ハ浮華

の風俗なれハ他の人もされを閲傳へ雷同して社中へ入来りしものもありさり其時の人〻を思ふ遂るも遂さるも今ハ皆鬼籙上の人のミ多し嶺春泰鳥山松圓といへる男なミハ頗る出精せしゝ今ハ則ち亡し同僚淳庵なミも新書上木の後なりけれども五十を満さすして世を早うせり其古る往来せし者なて今生残りしハ翁よりハもるゝ歳下の人なれども弘前の醫官桐山正哲ばてなり又其頃此業の著実なるを知れるものハ格別さへて知らさるものハ大な怪しミ疑ふもの多ゝりき

抄集り来りさる者の内なも其業のもゝ〳〵しゝらすそれと突き留めもなき面倒なる事もへ遂な精力盡きて又ハ今日の生計な逐るゝ人ハ其しゝる見へさるな倦ミ旦ハ已を得す中道なして廃するミいへる族も多ゝりき又ハ偶志厚ゝりし者も多病なして事ならす早世せしも數多ありさり最初より會合ありし桂川甫周君ハ天性頴敏逸群の弋なてありしもへ彼文辞章句を領解し給ふ事も萬端人より早く未さ弱齢ミハ申社中なても未頼母數芳しゝて賞嘆しさりき尤其家代ミ阿蘭陀流

外科の官醫なる上其父甫三君ハ青木先生より「アベセ」二十五字をむ〻め僅なりとも蘭語なりとも傳り給ひしを聞覺へ少しハ其下地もあり故よや退屈のゆうすもなく會去とよい怠りなく出席しさまへり

一同盟の人〻毎會右の如く寄つどゐしかくありしといへども各其志す所異なり是れ実ニ人の通情なり先つ第一の盟主とする所の良澤ハ奇異の士なへ此學を以て終身の業とし盡く彼言語ニ通達し其力を以て西洋の事躰を知り彼書籍何ニ

ても讀得さきの大望もへ其目的とする所康熙字典なとの如き「ヴォールデンブック」を解ずせんといふ事ニ深く意を用ひさりそれもへ世間浮華の人ニ多く交る事を厭ひさり此學開へき天助の一ッニハ唱へ此頃より人常ニ閉戸して外へも出す亦湯沢といふ人天性多病ニも交らす特此業を以て楽みとし日を消居れり其君昌庶公ハ其素心の情合をよく知り給ひ彼ハ元来異人なりとて深く咎もし給ひす然れとも本務ニ怠りがちなりけれハ勤方疎漫なりと上へ告奉りしニ人もあり又其業のとめをなし終ニハつとめるも勤めなり公の曰く日〻の治業を天下後世生民の有益とする事を為んとするも取り直さす其業を勤るなり彼ハ欲する所ありと見もれハ其去のむ所ニ任せ置くへしとて一向ニ打捨さし置れさりすでニ其前後「ポイセン」名人「プラクテーキ」抑いへる内科書を求められ其紙端ニ御印

章押〳〵給ひて典へ給ひ〳〵事もあり元来其弥を楽山と呼ひ〳〵ゞ高年の後自ら蘭化と称せり古れハ昔〳〵君侯より賜り〳〵名なりと古れハ君侯常ゟ良沢ハ阿蘭陀人の化物なりと御戯れゟの給ひ〳〵ゟり出さり其寵遇かく〳〵の古と き事ゟてあり古れ故良沢心のまゝゟ其學の修行出来さる事なり古扨浮華の華雷同〳〵て従事せ〳〵も多くれとも創業の迂遠なるゟ倦て廃するもの少らさり〳〵ゟ此先生生涯一日の古ミく確乎と〳〵て動らさり〳〵もへ其中ゟハ今の如く其業を遂け〳〵もあるこゟ思ハるゝなり古れ全く此の事開くるの時ゟ遭ひ〳〵もへゟや

又中川淳庵ハ兼て物産の學を好める故何とぞ此業を勤め海外物産をも知り明らめさき事を欲せり亦傍ら奇器巧技の事を嗜ミ自ら工夫を凝〳〵て新製せるも少らす○和蘭局方を訳〳〵撰り〳〵ゟ業を卒へす天明の初年瞬症を患て千古の人古れいふ目當とてハなれり

桂川君ハさ〳〵て古れとい

見へねとも前ゟもいへる家柄なれバ只何となく此事を古のゝ給ひ齢ハ若〳〵氣根ハ強〳〵會毎ゟ来り給ひし此擧ゟ加り給へり翁ハ古れらとハ大ゟ違ひ始て觀臓〳〵和蘭國ゟ徴〳〵て千古の差あるゟ驚きいらゟも先此一事を早くあきらめ治療の用を助けさく又世醫法術發明の間ゟも用立つゆうゟる〳〵とき志のゝなりけれハ何とぞ一日も早く速ゟ此一部見るへきものとな〳〵なんゝ心掛け此一書の訳を〳〵其事成らハ望足りぬと心を決〳〵思を興せ〳〵ゟ依て深く彼諸言を覺へ他事を為すの

望ハなろり〳〵なり五色の糸の乱れ〳〵ハ皆義なるものなれとも赤とろ黄なるとろ一色ニ決〳〵餘ハ皆きろ棄る心ニて思ひ立〳〵なり其節思憲するニ應神帝の御時百濟の王仁初て漢字を傳へ書籍を持渡りてより代〻の天子學生を異朝へ遣ハされ彼書を學ハせ給ひ數千歳の今ニ至りて始めて漢人ニも恥さる漢學出来る程ニなりさるなり今首めて唱へ出せる一の業何とぞして俄ニ事整ふて成就すへきの道理なり〳〵只人身形體の一事千載以説の違さる所を世ニ示〳〵何とぞ其大體を知らせとく

思ひ〳〵迫ニて他ニ望む所なし〳〵と一決〳〵右ニもいへる如く一日會〳〵て解せ〳〵所を其夜宿ニ帰りて直ニ翻譯〳〵記〳〵とめ置さるなり同社の人〻翁ろ性急なるを時〻笑ひ〳〵もへ翁答へけるハ凡丈夫ハ草木と共ニ朽へきものならすろとくハ身健ろニ齢ハ若〳〵翁ハ多病ニて歳も長けさろ往〻此道大成のときニハ迚も逢ひろさかるへ〳〵人の生死ハ預め定めろさ〳〵始て發するものハ人を制〳〵後れて發するものハ人ニ制せらるといへり此故ニ翁ハ急き申すなり諸君大成の日ハ翁ハ地下の人

となりて草葉の蔭ゝ居て見侍るへゝミ咎けれハ桂川君なとハ大ゝ笑ひ後ゝハ翁を諢名（アダナ）して草葉の蔭と呼ひ給へり斯るうちとまて年月ハ過行き白駒の隙過るよりも早くとかくせゝ間ゝ三四年の月日を重ね逐ゝ世の人も聞傳へて尋来るもありゝゝへ西洋医説の臓腑経絡骨節等其既ゝ知る所を以て大凡ハ其真面目を語り示せるかミふハなりとり

一解體新書未ゝ上木の前なりゝゝ奥州一ノ関の醫官建部清庵由正といへる人もるゝ翁ゝ名を聞傳へて平生記ゝ置とる疑問を送りゝ事あり其書ゝ記せゝ事とも我業ゝ就きてハ感嘆する事多くされまて相識れる人ゝもあらす翁と志を同うするも千里一契なり其書ゝいふされまての阿蘭陀流外科片假名書の傳書を此術の基とするまてなるハ扨ゝ残念なり世ゝ有識の人出てゝ昔ゝ漢土ゝて佛經を翻譯せゝおとくゝ阿蘭陀の書をも和解なゝさらハ正真の阿蘭陀醫流成就すへゝと記せられとりあれハ其時ゝより二十餘年前ゝよりの懸念ときたへとり実ゝ其見解感するも餘ありとゝらす

も翁其人よりあとより〳〵を抑躍〳〵吾等の知己千載の一奇遇なりと咨書を報〳〵夫より往復絶す〳〵て書信を通〳〵其縁よりて品〻の事もあり門人等其書通を書きあつめ蘭學問答と名け留とり

後ヨ子孚等藏版となしぬ和蘭醫事問答と題せしものハ去れなり

一翁ハ元来疎湯よりて不學なるもへ可成りよ蘭説を翻譯〳〵ても人のもやく理會〳〵曉解するの益あるゆうよなすへきカハなく去れとも人よ託〳〵てハ我本意も通〳〵りさくやむ去となく拙陋を顧す〳〵て自ら書綴れり其中よ精密の微義もあるへ〳〵と思へる所も解〳〵りさき所ハ疎漏なりと知りながらも強て解せす惟意の達〳〵さる所ばかりを擧置けるのミなり譬へハ京へ上らんと思ふよハ東海東山二道ある事を知り西へ〳〵と行けハ終よハ京へ上り着〳〵といふ所を第一とすへ〳〵と其道筋を教るまてなりと思ふ所ヨより其荒増の大方ばかりを唱へ出せ〳〵なりあれを手初ふ〳〵て世醫の為よ翻譯の業を首唱せ〳〵なり素より浮屠氏翻譯の法ハ辨へす殊ふ和蘭書翻譯といふ事ハ古今ふなき所の最初なれハ此讀ミ初の時ふあとり細密な

る所ハ固より辨すへき様もなく只幾重よも腎さ
るものゝ先第一ハ臓腑内景諸器の本然官能を知
らすしてハ濟す何ぞそ各其実を辨へ〳〵互ハ治療
の助ふなさとやと思へるゝ本意とゝりなり此志
も〻へ此譯をいそぎて早く其大筋を人の耳ハも留
り解し易くなして人〻是ハて心ハ得し醫道ハ比
較し速ハ曉り得せしめんとするを第一とせり夫
故なるさけ漢人称する所の舊名を用ひて譯しあ
けさく思ひしなれとも此ハ名るものゝ彼ハ呼ふ
ものゝハ相違のもの多けれハ一定しゝさく當惑

せり彼是考へ合すれハ迚も我より古をなす去と
なれハいつれふしても人〻の曉し易きを目當と
して定る方と決定して或ハ翻譯或ハ對譯或
ハ直譯義譯とさまくハ工夫し彼ハ換へ此ハ改め
晝夜自ら打戯り右ハもいへる如く草稿ハ十一度
年ハ四年ハ満ちて漸く其業を遂けさり尤其頃ハ
彼國俗の精密微妙の所ハ明了すへき事ハあら
す今の如く思ひのらす開けし所より見る人ハさ
そ誤解のゝといふへく首めて唱る時ハあさりて
ハなゝく後の識りを恐るゝやうなる碌〻さるる

簡よりて企事ハ出来ぬものなり〳〵れ〳〵も彼大躰よ
ときて合点の行〳〵所を譯せ〳〵まてなり梵譯の四
十二章經も漸〻今の一切經よ及へり是翁ゝ其頃
よりの宿志よりて企望せ〳〵所なり世よ良澤といい
ふ人なくハ此道開〳〵へゝらす且翁ゝ如き素意大
略の人なくハ此道かく速ゝよ開〳〵へゝらす是も
亦天助なるへし

一扨右の如く一通り譯書出来されとも其頃ハ蘭説
といふ事少〳〵よても聞及ひ関知る人絶てなく世
よ公よせ〳〵後ハ漢説のみ主張する人ハ其精粗を

辨せす去れ胡説なりと驚き怪みて見る人もなか
るへしと思ひ先つ解躰約図と云もの を開版して
世よ示せり是ハ俗間よいふ報帖(ひきうす)同様のものよて
ありさり此業江戸よて首唱して二三年も過去ろ
よも関傳へ蘭学といふ事江戸よて大よ開けしと
いふ去と通詞家なるとよてハ忌みて憎みしよ左も
あるへし如何さま其去ろまてハ彼家くハ通詞迄
の事よて書物讀て翻譯する抑いふ事もなうりし
時節よて冷めしをきむめしといひ一部一篇とも
譯すへき「エーンデール」といふ語を一のよりれ二
の分れと和解し通しかひて事済む様なる事よて
ありしと見へさり尤醫説内景抑の事よ至りてハ
誰一人知る人なき筈なり或る一譯士此約図を見
て「ゲール」といふものハ身躰中よハなし「ガル」の誤
なるへし「ガル」ハ即ち膀なりと不審せしと但
此前後よりして翁ゝ華関東よて創業の一挙あり

〻より其根元とする西肥の通詞革の志をも大に引立〻らるゝ知るゝなり

一約図既に成り本篇も出版まで成り〻らゝも前條いへるごとく紅毛談さへ絶版となり〻程の事なれハ西洋の事ハ假初にも唱ふる事ハならぬ事なれ共併し和蘭ハ其中にても各別なるゆや否の所不分明にて屹度ごれハ苦〻らすといふ事も決〻らさく若し私かに去れを公にせハ萬一禁令を犯せしと罪を蒙るへきも知られす此一事而已甚恐怖せし所なり然れとも横文字を其まゝに出せるハあらす且讀て見れハ其姿ハ知るごとなり

我醫道發明の為なれハ敢て苦〻らすと自ら決定し何れにも翻譯といふ事を公にする初を唱ふへしと竊に覺悟を極めて決断せし事なり但是ハ其事の最初なれハ何とそ此一部恐れ多くも冥加のため　公儀へ獻し奉りさき志願なり〻〻幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君ハ前にいへる如くの舊友なりけれハ此法眼に謀りしに其取扱推舉により御奥より内獻し奉りぬ斯く障もなく事済〻ハ難有御事なりき又翁ハ從弟吉村辰碩ハ京都に住居せり此人の推舉を以て時の関白九條

家並に近衛准后同前公及び廣橋家へも一部づゝ奉りぬ　されはよりて三家より目出度古歌を自ら染筆して賜り又東坊城家よりハ七言絶句の詩を賦して賜りぬ　尤時の大小御老中方へも同じく一部つゝ進呈しさり何方とても何の障れる事もなく相済みぬされらはよりて大に此擧に於る安堵をなしさりきされ和蘭翻譯書公けになりぬるとゝめなり

一翁の初一念に八此學今時のあとく盛になり斯く開くへしとハ曾て思ひよらさりしなり是れ我不きより先見の識乏しきもへなるへし今に於てハ

れを顧ふに漢學ハ章を飾れる文もへ其開け遲く蘭學ハ実事を辞書に其まゝ記せし者もへ取り受けしゆく開け早ちりし欤又実ハ漢學にて人の智見開けし後に出さる事もへかく速ちなりしゝ知るへらす然れとも斯業の自然に開くへきの氣運にや此ちろより前に記せる東奥の建部氏翁に八二十歳ちり長とる翁なるゝ不思議に書牘の往復ありしゝ我答書を得て実に狂喜啻ならすと申越せしゝ謝なれとも身の老耄を如何せんとて其息亮策を我門に入れ續ひて其門人大槻玄澤と

いふ男をさ〳〵登せて我門ゟ入れとり此男の天性を見るゟ凡そ物を學ふ事実地を踏されハなすたゝなく心ゟ徹底せさる事ハ筆舌ゟ上せす一躰豪氣ハ薄けれとも すへて浮とる事を好す和蘭の究理學ゟハ生れ得とる才ある人なり翁其人と才とを愛〳〵務めて誘導〳〵後〳〵ハ直ゟ良澤翁ゟ託して此業を學せ〳〵ゟ果〳〵て勉礪怠らす良澤も亦其人を知りて骨法を傳へ〳〵もへ程なく彼書を解する事の大概を曉れり其際同僚淳庵桂川法眼又福智山戻林と往来〳〵て此業を講究せり又大ゟ志を興

〳〵此上ハ西遊〳〵て長崎ゟ至り直ゟ彼通詞家ゟ從ひ學ひ試さきよ〳〵をとゝり〳〵もへ我も良澤も喜ひ許〳〵汝壯年行〻矣勉メヨヤ其事を済さハ宿業益〻進むへ〳〵と懲懲せ〳〵ゟより愈憤起〳〵て志を負笈ゟ決〳〵とり然れとも素ゟり貧生の事なれハ力の及さる事ともなり翁其志ゟ感〳〵專ら其力を助けんと思へとも翁も其ゟるハ生計ゟと〳〵思ふ程ならねハ力の及へるとけハ其れを助け且御同學と〳〵福知山戻も淺ゟらぬ恩遇ありてゆゝて彼地ゟいさゝ本木榮之進といへる通詞家ゟ寄宿〳〵教

を受け又彼より問ひ此より謀り油断なく修行して帰府しより爾後ハ江戸永住の人となる事を得たり扨嘗て編集し置ける蘭學楷梯といふ書あり之を帰府の後藏板して同志に示せり此書出て後世の志あるものこれを見て新に憤悱し志を興せしも亦少からす此人を生し此等の書の出る事となりしも翁ハ本志を天の助け給ふの一端なりやと思ひし事なり

一此餘我門より出入せしものゝ内斯業を學ひ掛りしもの多からりけれども或ハ久しく都下に足をとゝむるとかとゝ或ハ官途に羈れ或ハ生計に逐れ或ハ病身或ハ夭死抔と皆もゝ〳〵事を遂けしもなからりき然れども翁ハこれを幾起せしより其支派分流を生し出せしハ少からす扨安永七八年の頃長崎より荒井庄十郎といへる男平賀源内ハ許に来れりこれハ西善三郎ハ奮の養子にして政九郎といひて通詞の業を為せし人なり社中蘭學を興すの最初なれハ翁ハ宅へ招き淳庵なゝ共にサーメンスプラーカを習ひし事もあり源内死せし後桂川家に寄食し其業を助け又福智山

侯へも出入して侯の地理學の業をも加功しさり侯尊ら地理学を好み給ひ庄十郎後ハ他家を在り泰西國説等の訳編あり

て森平右衛門と改名しさり此人江戸へ下りて聊社中を誘發せさりしもあらさらんも今ハ千古の人となれり

一津山侯の藩醫を宇田川玄隨といへる男あり去れハ元来漢學を厚く博覽强記の人なり此業を志興して玄澤よりて彼國書を習ひ其紹介をして翁と淳庵へも往来して桂川君良澤へも漸く交を通しと

（後を長崎前の通詞家白川侯の家臣となりて石井恒右衛門といふ人林へも出入して彼の言語の

數くを習ひしもろ元来秀きをして鍼根の人なへ其業大を進み一書を訳して内科撰要と題せるを著せり是れ簡約の書といへとも本邦内科書新訳の始なり惜しひなる四十餘をして泉路を趣けり此書説後をいさ漸く全部の開板なれり

一京師を小石元俊といへる醫師あり獨嘯菴の門人をして醫事を志厚き男なり翁因より相識れる人をあらす彼れ始て解體新書を讀みて千古の説を差ひしを疑ひ親敷臓して斯書の着実なるを感して尓来深くあれを喜ひ翁へ書信を通して猶其解しかさき所を尋問せり天明五年の秋翁侯家を陪して其國を罷りし帰路上京せし時滞留の間

日夜来て問難しさり其後ハ東遊し玄澤ゟ僑居を主とし在留一年ゟ近く毎く社中と此業を討論せり蘭學とてハ為きれとも帰京の後其塾ゟ於て出入の諸生徒ゟ鮮體新書を毎ゟ講して其実法を人ゟ示せしとされ関西の人を誘奬せしの一ッなり

一大坂ゟ橋本宗吉といふ男あり傘屋の紋ゟ事を業として老親を養ひ世を営めりと不學なれと生来奇戈あるものゟへ土地の豪商とも見立て力を加へ江戸へ下して玄澤ゟ門ゟ入れさり僅の逗留の間出精して其大躰を學ひ帰坂の後も自ら勉めて

其業大ゟ進ミ後ハ醫師となりて益此業を唱へ從遊の人も多く漸く譯書をも為し五畿七道山陽南海諸道の人を誘導し今ゟ於けるいよ〳〵盛なりと聞けり江戸へ来りしハ寛政の初年の事なり帰阪の最初右の元俊も彼ゟ志を助けて其業を礪まし めしとなり

一土浦侯の藩士ゟ山村弋助といふ一奇士あり其叔父市川小左衛門を介として翁ゟ蘭學の事を問ふ翁其ころハ年老て此業を以て悉く門人玄澤ゟ託しされハ玄澤彼國文二十五字ゟりして教立さり

天性其戈備り殊ゝ地學を古のゝ專ら其筋を專精せしゝが白石先生の采覽異言を增訳重訂して十三卷の書を譯撰す栗山先生の推挙ゝよりて官へも内献せり其餘翻譯の内旨も奉しゝりしゝ其業も全からすして即世せり惜むへしゝと云ふへし萬國輿地の諸説ハ未ゝ漢人の知らさる所のもの多し是れ蘭學のゝ古ゝゝ至れるの功なり

一石井恒右衛門ハ長崎舊の訳官馬田清吉といふものなりしゝが其家業を他人へ遜りて江戸へ来り天明の中頃白川侯の家臣となれり侯其初めを知り

「ド、ニユース」本草を和解せしめ十數卷の譯説成れり其業を卒へもして是亦異客となれり稲村某といふ男取立し「ハルマ」釋辞の書ハ全く此人の力ゝ頼れり此譯書ハ近来初學稽古の人ゝ考閲の益ありといふ此人もゝ舊職業を以て仕官もへしゝて東下せしゝハあらねども斯の如く隆盛の中へ来りし事もへ專ら此道の助けとなりとり

一桂川家の事ハ前ゝもいへるゝとくなり甫周君ハ校群の俊才もへ元そ和蘭の事ゝも略通し其名聲四方ゝ走せ尤常ゝ其業事の起ハ　公上ゝる知し

召れ〳〵事なれハ時〻西洋筋の事ハ和解御用も命せられ〳〵趣なり其草稿其家ニハ有へ〳〵和蘭薬模海上備要方抔云ふ譯説の著書ありと聞とも未ざ成熟の書を見ず年いまだ六十ニ満ず〳〵て千古の人となり給へり

一因州矣の醫師稲村三伯といふ男あり其國ニ在りて蘭學階梯を見て憤發〳〵て江戸へ下り玄澤ゟ門を扣き此業を學ぶ後ニ彼「ハルマ」といふ人著せる言辞の書を石井恒右衛門ニ依りて譯を受け十三巻ゟいふ和語解訳の書を編せり其始め石井へ介

をな〳〵原書も借〳〵與へとりと其初稿ハ宇田川玄随岡田甫説といふもの加切〳〵て時〻石井が許ニ往来〳〵て成就せりと訂正の時ニ至りてハ他ニ力を添へ〳〵ものもありとも関けり後故ありて矣邸を退き江州海上郡の邊ニ浪遊〳〵遂ニ名を随鳴と改め京師ニ在りて專ら此業を唱へ〳〵由今ハ古れも古人となれりと聞けり併〳〵釋辞の書を企て成せ〻ハ初學者の為ニ一切といふへ〳〵

一、今の宇田川玄真初ハ安岡氏ニて伊勢の人なり江戸へ出でゝ岡田氏を冒〳〵上ニいふ宇田川玄随の

漢学の弟子なりし由玄随其志の固窓なるを知りて蘭学に引導せんとの意ありて毎々玄澤へも導せしことありしとなり然るに玄随一とせ疾駕に陪して其國に至りしころや養家を辞し本姓安岡に復せし時玄真初て師命を含て玄澤に許に来り此学を習ん事を請ふ蘭字の書方まてハ玄随より習ひ受けしと見へされバ為に蘭言譯語の一小冊を授けて寫さしめ又彼の局方の書を讀しむ日々往来し且寄食の事を乞ひけれども其ころ家に支れる事ありて暫く同社嶺春泰が許に託せ此頃

春泰疾んて日々に篤し終に物故せり故に此後玄澤甫周君へ謀りて同所へ託して曰く此男蘭学執心にして其依る所なきを憂ふ為に汝れを取扱ひ給ちハ往々君の業を助くべきものなるをと説く君直に諾して汝れより同家に入塾せるおとなりぬ其際も玄澤がもとに往来して譯法を問ふ事ちくなり本此男蘭説の実際に心醉していふ吾他に望む所なし随意に此業の修行出来るの師塾ならハ何方へも寄宿なしときいふ宿願なりそれゆへ桂川家へ託せしことなり然るに其ころ

同家ハ官務と治業と繁多よりして彼ゝ素志を達すること能ハざるを玄澤より訴るゝと繁くなり一日玄澤翁より此事を語る翁其ゝろハ次第より専門の療術寸暇なく素業を勤むへき暇さてハなき身さなりとり然れとも翁ハ素より此道より志深ゝりけれハ猶益〻其道を開さきの志止ゝさく解体新書成就の後も彼「ヘイステル」外科書の訳文より手をゝけ金瘡瘡瘍の諸篇ハ草を起して數巻の稿ハ出来さりしゝ其頃度〻の病より羅りしより傍人も諫めゝれハ此業勤勉の崇りをなす所なれハ少間廃すべしと

いひ尤玄澤等もひとすら心志を放散し偏より老を養ふべし不肖といへども其業吾ゝれより代るべしともいひ且ハ次第より老行く年なれハ中〻大業遂べき氣根もなく其後ハ今より中絶しさりけれとも其本志の已〻ゞとく数年の間見あさりし蘭書の分ハ大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭す購ひ求め相應より藏書も集りとり此學を事とせんとするもの誰よりあれ其志ハありても書籍より乏しき時ハ事成らむと思ひ自ら讀よりハ暇あらすとも往〻子弟等ハもとより志ある人より借典へ

て此道開くるとめの裨益とるべしと思ひ数十巻を藏しさり扨同じくハ年若く此道に志篤き人を見出し別に一女に妻し養子とし此業を遂させ我醫道の未だ開ずして未だ足らざる所を開きて之を補綴し諸民の疾苦を廣済なしときものと朝暮心にかけし折なれバ幸に玄真ある由を喜ひ即ち去れを招き其志を問しに其云ふ迎玄澤が申せしに違ハずよりて翁が家に迎へ父子の契を結ひとり玄真も其意を得て深く喜ひ我家の藏書を自在に取扱ひ日夜怠らず學ひ黽勉一ろとなりす

やゝもすれハ夜を徹する事もあり其精力の斯なりしかも日へ進める事も又速にして其功昔日に倍せり翁ゝ喜ひも亦知るべし志ありけれども其頃ハ年弱き時なれハ彼に専ら出精すれども亦氣の移りやすき容氣盛の最中なれバ身持至て放蕩ミなり去ども異見をも加へされども愈募りて已きるにより惜むべきの弋子ミハ知りとれども捨置ハ如何なる事をや仕出し矣家の御名を汚すべき事もあるべしと老ゝ身の其心一日も易らず己むことを得す離縁して長く交を絶さり

一これよりて同社も交を通せす彼も頼ミ少き身
となりて甚ト窮厄してあり〳〵去なゝら其好む
所の業ハ廃せさりしを彼稲村なる者抑ひそゝよ
見次せ〳〵よりなり其際稲村等我男伯玄ヨ内〻謀
りて藏書中内科一二部の書を備〳〵て譯せしめな
んどして其窮を凌せ〻いふこと後ヨ聞とり遂
ニハ自新して志を改めとりど聞とり亦其頃稲村
ゝ企〳〵「ハルマ」釋辞の書ハ彼ゝ加功して其業を助
成せり
一二三年過て後宇田川玄随病よりて物故せり其

嗣子なきを以て孤〻養子を求めとりあゝよ於て
稲村氏仲立〳〵て宇田川の家を継せとり前ヨいへ
る如〻玄随へハ去ゝじゝの縁もあり其なゝり〳〵
後ヨいへさも今亡父ヨなり〳〵人の志を継き其身
も志す所の本意を達ヨりさいふへ〳〵尓後益〻専精
〳〵て数多の譯説をも為〳〵醫範提綱といふものを
開板〳〵既ヨ一家の事成りぬ其行ひ改り其志立ち
〳〵上ヨて宇田川姓も継〳〵事なれハ再ひ翁へも交
通をもる〳〵給れと伯玄玄澤等ゝ申ヨまゝせ然る
上ハ長〻悪ミ速〻へきよハあらせとて出入を許

〳〵故の如く相親ミ玄真翁ニ仕ることゝ師父の如く
なれハ翁も亦彼を見るこゝ子の如くもるの昔ニ
復せり
一玄澤ハ元きニ其名夙く成りて近頃官府より〳〵て
新ニ御藏和蘭の書翻譯の　台命を蒙り〳〵至り
ぬ昔翁ゝ輩の假初ニ今〳〵學業なり〳〵今翁ゝ世
ニありて顯らゝニかゝる　嚴命を蒙り奉り〳〵ハ
冥加ニもありゝとく翁ゝ宿世の願滿足せりさい
ふへ〳〵何卒生民廣濟の為ニと思ひ立ちて取付き
ゝとき此事ニ刻苦せ〳〵創業の功終ニ空〳〵らす

續ひて玄真も亦同樣の　命を蒙り相俱ニ此ニ從
事せる支となれり仰ひて感戴するニ堪へさる所
なり尤も去れ他ニもあらぬ翁ゝ誘導せ〳〵我門の徒
等ニ〳〵て此盛擧ニあつゝられる老ゝ身の本懷亦何
をゝ去れニ加ん翁ゝ高齡を錫り〳〵天録もあらゝ
さく當時艸野の蔭と諢名(アダナ)せられ〳〵我身今もなを
聖代ニなゝらへて其全備を見せ〳〵め給ふ去と限
りなきの恩光旻天の冥感ニやあらん
一此餘玄澤玄隨玄真ゝ門ゝより出〳〵青藍の器もある
ニ〳〵なれとも翁ゝ子の子の孫彦ニ〳〵て委〳〵〳〵知

る所よりあらす三都の間諸侯の國々より分處するも多かるへし

一昔長崎より西善三郎ハ「マーリン」の釋辞書を全部飜譯せんと企しと聞しかも手初迄よりて事成らすと聞けり明和安永の頃よりや本木榮之進といふ人一二の天文暦説の譯書有りとかり其餘ハ聞く所なし此人の弟子より志築忠次郎といへる一譯士ありき性多病よりして早く其職を辞し他へ遜り本姓中野より後しして退隠し病を以て世人の交通を謝し獨學んて專ら蘭書より耽り群籍より目をきらし其中彼文

科の書を講明しさりとなり文化の初年吉雄六次郎馬場千之助なといふもの其門より入りて彼屬文並より文章法格等の要を傳へしとなり此千之助ハ今ハ佐十郎と改名し先年臨時の御用よりて江戸より召寄られしから數年在留し當時御家人より召出されて永住の人となり專ら蘭書和解の御用を勤め此學を好めるもの皆其讀法を傳ふる事となれり我子弟孫子其教を受るなとなれハ各々其真法を得て正譯も成就すへし杉忠次郎ハ　本邦和蘭通詞といへる名ありてより前後の一人なるへしとなり

若し此人退隠せすして職にあらハ却てうくまて
にハ至らさるへきう是れ或ハ江戸にて我社の師
交もなくして推て彼邦書を讀出せる事の始りし
に彼人も憤發せるの為す所欲とも思ふる是亦昇
平日久しくわれらの事も世に開へきの氣運とい
ふへし

一一滴の油ハれを廣き池水の内に點すれハ散して
満池に及ふとやさあるゝ如く其初前野良澤中川
淳菴翁と三人申合せ假初に思ひ付し事五十年に
近き年月を經て此學海内に及ひ其所彼所と四方

に流布し年毎に譯説の書も出るやうに聞けりと
れハ一犬実を吠れハ萬犬虚を吠るの類にて其中
にハふきもあしきもあるへけれともそれハ姑く
申に及すうくも長命すれハ今の如くに開る事を
聞なりと一とひハ喜ひ一とひハ驚きぬ今此業を
主張する人是よての事を種々の聞傳へ語り傳へ
を誤り唱ふるも多しと見られハ跡先なるうら覺居
さりし昔語をうくハ書捨ぬ
一つへすくも翁ハ殊に喜ふ此道開けなハ千百年の
後くの醫家真術を得て生民救済の洪益あるべし

と手足舞踏雀躍して堪へざる所なり翁幸て天壽を長して此學の開けゝるより初より自ら知りて今の斯く隆盛に至りしを見るハ古れ我身に備りし幸なりとのゝいふへゝらす伏して考るに其実ハ恭く太平の餘化より出し所なり世に篤好厚志の人ありとも何ぞ戰亂干戈の間にして古れを創建し此盛舉に及ふの暇あらんや恐多くも今茲文化十二年乙亥ハふさらの山の大御神二百ゝせの御神忌にあさらせ給ふ此大御神の天下太平に一紙し給ひし御恩澤数ならぬ翁ゝ輩まて加り被り奉りくまくすミくまて神德の日の光照りそへ給ひし御德なりとかそれとゝろしこゝ仰まても猶あせりある御事なり其卯月古れを手錄して玄澤大槻氏へ贈りぬ翁次第に老疲れぬれハ此後ゝゝる長事記すへしとも覺すまゝ世に在るの絶筆なりと知りて書つゞけし跡先きなる事ハよきに訂正し繕寫しなハ我孫子等にも見せよゝし八十三齡九幸翁漫書す

蘭學事始卷二終